

西脇市消費生活センター

☎22-3111(防災安全課内)
No.178
災害発生後の便乗悪質商法などに注意

地震や台風、大雨などによる災害後は、住宅の修理など復旧・復興に便乗した不審な勧誘や詐欺、悪質商法等によるトラブルが起こる恐れがあります。次の事例を参考に、冷静に対応しましょう。

■事例1 「家の点検を無料で行う」と、突然業者が自宅を訪問。点検後、「すぐに修理が必要だ」と契約を迫られた。

不要な勧誘はきっぱり断りましょう。また、住宅の修理やリフォームを契約する場合は即決するのではなく、工事内容や期間、価格等の契約内容をよく確認し、複数の業者から見積もりを取って十分比較検討しましょう。

■事例2 公的機関を装って自宅を訪問し、「被災地支援のための義援金を募る」と言って強引に金銭を要求された。

公的機関が戸別訪問して義援金や募金の協力をお願いすることはありません。また、トラブルは必ずしも被災地で起こるとは限りません。親切心につけ込まれないようにしましょう。

夏から秋は台風が多く発生する季節です。災害発生後に不審な勧誘があった場合は、消費生活センターへご相談ください。



随筆「美学」が掲載されたホトギス (合資会社ホトギス社)

すが、その中で、降機時に必ず分かる人があったと。「お客様の流れの中で一人だけ立ち止まり、必ず振り向かれる人がいる。そして操縦席に向って姿勢を正して深く一礼をされる。端正な氏の姿は実に美しい。」その人物は、本市出身で元プロ野球選手・監督の鈴木啓示さんでした。

鈴木さんは、通算317勝を挙げ、日本プロ野球名球会会員で、わが市が誇る不動の大エースです。金子さんが見ておられた鈴木さんの姿を想像しながら随筆を拝見し、心に響くものがありました。

このたびのコロナウイルス感染症のことで、ICT化の進展をはじめ社会が激変しようとしています。しかしながら、人への「思いやり」や「感謝の気持ち」を私たちが子どもたちにしっかりと伝えなければならぬと思います。皆さんとともに誇れる西脇市を創ってまいります。



西脇市長 片山 象三

市長からの手紙

西脇を元気に!!

79

身に付いた美学

コロナ禍、梅雨前線の停滞による豪雨で九州をはじめさまざまな所で甚大な被害が出ており、心を痛めている皆さんか、心温まる話題が舞い込んできました。

「貴市出身の鈴木啓示さんに届けていただきたい」と、福岡県の金子清黙(金子三郎)さんから郵便。中身は日本最古の月刊誌「ホトギス」に掲載されている金子さんの随筆「美学」でした。金子さんは元JALのパイロット。39年余りの現役時代には、多くの有名人が搭乗されたそう

あぐりコラム 16

西脇市では黒田庄和牛や山田錦、イチゴなど全国に誇れる地域食材が生産されており、さまざまな農業振興施策を推進しています。このコラムでは、本市の農業に関する旬な情報をお伝えします。

■問合せ 農林振興課(市役所内線322)



黒田庄和牛はJAみのり特産開発センターなどで販売

地産地消で「食」を応援してください

西脇市が誇る農産物といえば、「山田錦」と「黒田庄和牛」。西脇市は酒米の王様「山田錦」の主産地の一つで、兵庫・灘五郷の酒蔵はもとより、青森・愛知・秋田・栃木など全国50以上の酒蔵に出荷され、造られた日本酒は良質な一品として国内外で広く親しまれています。一方、黒田庄町では、農家が兵庫県内で生まれた血統書付きの但馬牛を約2年半肥育。愛情込めて育てた「黒田庄和牛」はその後、多くが「神戸ビーフ」として格付けされ、世界の人々を魅了しています。

しかし、新型コロナウイルス感染症の影響で各地で予定されていた多くのイベントが中止に。さらに、飲食店等には休業が要請されたことで、日本酒や黒田庄和牛の消費量は激減しています。このままでは今後の生産に大きな影響を与え、産地崩壊につながる懸念されています。

農家の皆さんが丹精込めて育てた農産物を食すことは、農家支援や地域の特産品を守ることにもなります。地域食材を味わい、私たちの「誇り」を守りましょう。



▲バングラデシュ料理づくりで異文化理解を図る(令和元年度)

日本語の指導が必要な外国人児童生徒の学習補助(通訳・翻訳)や、学校生活への適応を促すため、市内では5人の「子ども多文化共生サポーター」が活動しています。

母語が通じるサポーターの存在は、子どもたちの心の安定につながる存在となっています。ある小学校に転入した外国人児童は、サポーターの勧めで日本語と母語の両方で自己紹介しました。二カ国語での自己紹介は同級生の関心を集め、児童は円滑に学校生活をスタートさせることができました。

他にも、多言語翻訳機を貸し出すなど、教育委員会は外国人児童生徒が安心して学べる環境づくりに努めています。

◆問合せ 人権教育課(市役所内線538)

教育委員会では毎年、小学生を対象に、「にしわきジュニアじんけん教室」を実施。異文化交流など、人権に関するさまざまな体験活動を企画しています。昨年度開いた異文化料理づくりでは、ベトナムやバングラデシュへの理解を深めました。参加した子どもたちは「上手にできた」と外国人と一緒に喜び、異文化に触れる楽しさを味わいました。さらに、市内で働く外国人技能実習生が活動に参加し、体験を通して子どもたちと交流を深めています。

これからも学校園や地域と一体となって、多文化共生を進めます。

好きです!! にしわきわたしのふるさと

心紡いで 彩り豊かな人財の育成

～誰もひるさに誇りと愛着を持ち、輝いて生きる 共生社会の実現に向けて～

教育委員会や学校園の情報をお知らせします。

在任外国人が増加する社会・多様化する学校
ともに生きる教育を進めます

西脇市の在住外国人人数は731人です(7月1日現在)。外国人の増加に伴い、就学する外国人児童生徒も増加傾向にあります。

多様化する日本の教室。いま、国籍や民族などが異なる子どもたちが互いを認め合い、対等な関係を築き、ともに生きる教育を進める必要性が増しています。

学校生活を支える「子ども多文化共生サポーター」

学校園・地域の中の多文化共生教育

新型コロナウイルスの感染拡大防止対策として、臨時休校が余儀なくされた学校。経験したことのない約3カ月を経て、学校に再び子どもたちの躍動する姿が戻りました。

「きょうの部活はむちゃくちゃしんどかった。こんなにしんどかったのは久々や」。練習を終え、真っ黒になったユニホーム姿で帰宅したときの子どもたちの第一声です。「どんな練習やったの」と問い掛けると、思うように体が動かないもどかしさ、新しい顧問の先生のこと、チームメイトのこと、次から次に話が弾み、途切れることはありません。まるで、休校中の鬱憤を晴らすかのように話す姿に、ほほ笑ましささえ感じました。「これまで大変やったけど、よう辛抱したなあ。さあこれからやぞ。頑張れよ」と思わず話しました。

このとき、「叱る指導!」の著者で、西脇市教育スーパードクターである菊池省三さんの講演を思い出しました。「頭ごなしに叱るのではなく、子どもの力を十分に見極め、認めた上で叱る。自分は見守られているという安心感を与えながら叱る。すると、厳しく叱られても素直に受け止めようとする気持ち芽生えてくる。子どもの成長につなげようとする指導者の意識がとても大切です」

この話を聞いたとき、叱ることも褒めることも、子どもの成長に欠かせない大切な要素だと再認識しました。厳しくも温かい指導は、子どもの個性や能力を磨き、自己実現へと導きます。それは、学校が担う大きな役割の一つです。明治5年8月の学制公布で、全国に多くの学校が誕生しました。いま、新型コロナウイルスによって学校の存在意義が問われていますが、子どもの成長を支える場としての学校は、今も昔も変わることのないでしょう。

(人権教育課)

心のスケッチ

136

人権教育課コラム

学校再開に思う